

富永茂樹 退職記念講演会

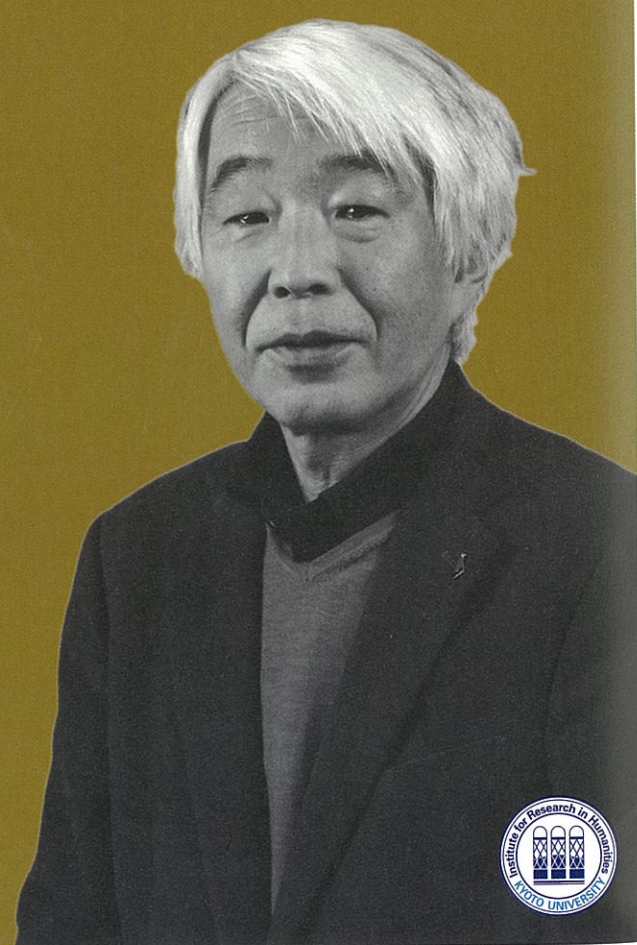
転位する観客

—啓蒙と革命のあいだで

演劇＝劇場(theatre)という語はギリシア語で「見る行為」を意味する *thea* に由来している。つまりこの公共空間を支配しているのはまずなによりも眼差しなのである。

ところで18世紀の末になって、観客の視線についてひとつの驚くべき言説が登場する。カントは『諸学部の抗争』でフランス革命という事件で重要なものは、公平かつ普遍的な眼差しを向ける観客が公的に出現したことであるという。この観客は革命に参加はしないがしかし熱狂的な存在ではある。時代を半世紀ばかり遡ると、習俗の穏和化とのかかわりで、商業にかかわる人間がたがいに観客であることに注意を向けていたのが『法の精神』のモンテスキューであった。ふたりのあいだで観客の眼差しは何度かの転位を繰り返す(ルソー、ロベスピエールなど)。この転位は啓蒙と革命の連続・非連続を考えるうえで無視できないであろう。他方で同じ時期には、実際の劇場でもひとつの変化が生じる。平土間と呼ばれる場所であつたまま劇を見る客の整理がはじまるのである。彼らは大声で野次を飛ばし、場合によっては演劇の進行に干渉する「熱狂した」存在であつたが、やがて座席が設けられることで、しだいに穏やかな存在となつたとされる。だがこの観客の静穏化は、カントが『啓蒙とはなにか』で推奨した活字印刷を黙って読んで理性を公的に使用する読者公衆の登場と同一な関係にある。したがってまたここでも、観客の転位は啓蒙の本質的部分、とりわけ公共領域の形成との関係で、きわめて重要な関係をもつことがわかつてくる。

プロフィール 富永茂樹(とみながしげき) 1950年生まれ。京都大学文学研究科博士課程単位取得退学。文学博士(京都大学)。1981年から長崎大学教養部講師、1984年より京都大学人文科学研究所助教授、教授。同時に文学研究科において授業を担当するとともに、2009年からは京都芸術センター館長兼職として現在にいたる。主要著書に『健康論序説』(1973年)、『自尊と懐疑—文芸社会学をめざして—』(共編著1985年)、『都市の憂鬱』(1996年)、『ミュージアムと出会う』(1997年)、『資料 権利の宣言—1789—』(編著2001年)、『理性の使用—ひとはいかにして市民となるのか—』(2005年)、『転回点を求めて—1960年代の研究—』(編著2009年)、『トクヴィル—現代へのまなこ—』(2010年)、『啓蒙の運命』(編著2011年)など。



◎日時

2015年3月10日(火)

16:00～17:30

◎場所

京都大学人文科学研究所
本館4階大会議室

◎主催

京都大学人文科学研究所
〒606-1850-1
京都市左京区吉田本町

◎お問合せ先

075-1753-6902
<http://www.zinbun.kyoto-u.ac.jp>
z-academy@zinbun.kyoto-u.ac.jp



●市バス 17, 203系統「京大農学部前」下車徒歩1分 31, 201, 206系統「百万遍」下車東へ徒歩5分
●京阪電車「出町柳」下車東へ徒歩15分 京都大学 北門入ってすぐ右
*駐車場はありませんので、公共交通機関をご利用下さい。